

『シャンティ』 通巻272号 2013年10月1日発行 (1.4) 10月の1日発行
1985年6月28日 第三種郵便物承認

平和への願い
本のチカラ

シャンティ 
Shanti

2013年10月
あき

272



公益社団法人
シャンティ国際ボランティア会

秋

は、読書の季節。10月27日～11月9日は「読書週間」です。

そのはじまりは、終戦間もない1947（昭和22）年。まだ戦火の傷痕が至るところに残って廃墟と化している状況でしたが、「読書の力によって、平和な文化国家を作ろう」という決意でスタートしたそうです。

第2回読書週間において、中古のオート三輪を改造し、本と映写機を積んで学校、公民館、町立図書館を回る企画がありました。ここにも、「読書を途切れさせない」という関係者の強い意志を感じます。

SVAの願いも、人びとが多様性を認めあい、共存できる平和な世界をつくること。

この号では、「読書週間」にこめられた思いと、平和とは切り離せない本のチカラについて考えます。

Index

シャンティ 272号 目次

4 定点観測…アジアから

タイ／カンボジア／ラオス／ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ
アフガニスタン／岩手／気仙沼／山元

12 特集 平和への願い 本のチカラ

読書週間の精神（小峰紀雄さん）／子どもたちを育む本のチカラ

20 特別対談 活字を読むことは

橋本真由美さん・早坂文明さん

24 世界の絵本を読んでみよう

創作絵本「目の見えないお母さん」アフガニスタン

26 シャンティな人たち

やべみつのりさん（紙芝居・絵本作家）

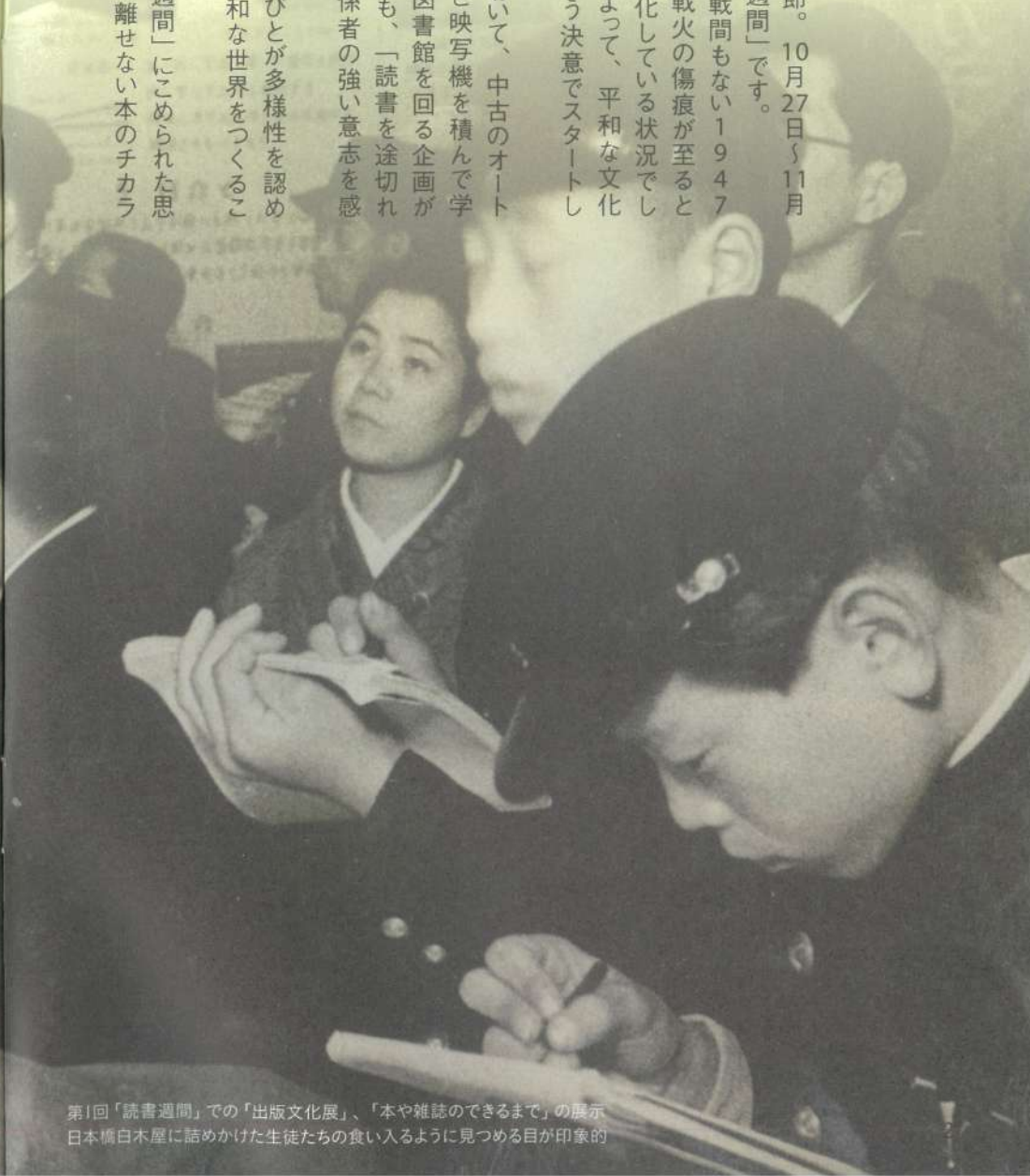
28 私の一冊 アジアの図書館サポーター

日本しゃんていな旅 浄国寺

30 スタッフの昼ごはん 陸前高田コミュニティー図書室

31 おしらせ／編集後記

32 道 擁護されるべき存在としての図書館—アドボカシーの観点から 岡本真



第1回「読書週間」での「出版文化展」、「本や雑誌のできるまで」の展示
日本橋日本屋に詰めかけた生徒たちの食い入るよう見つめる目が印象的



カンボジア仏教の復興と課題を初めて調査

カンボジア **Cambodia**

報告：手塚耕治（カンボジア事務所）

昨年7月から9月、仏教寺院の現状と課題を把握するため、1都6州112カ寺を対象とした現地調査を行いました。数百項目の質問は、①寺院の歴史（ポル・ポト時代以前、被害、復興）②寺院の組織（各構成員）③寺院の活動（宗教、伝統行事、社会活動など）④仏教教育活動の4つに分けられます。このほど調査結果がまとまりましたので、ご報告します。

ポル・ポト政権下、全ての寺院で仏像や建物はもちろん、池や森林も破壊を受け、僧侶の約3割が亡くなるなどのすさまじい弾圧が行われました。しかし、1979年1月に政権が崩壊すると人々は心の拠り所を求めてお寺の再建に取り掛かり、コミュニティの再構築を始めました。それから30年、カンボジアの人々は自分たちの力でお寺の伽藍をみごとに復興しました。

しかし、精神的かつ地域のリーダーである僧侶の育成、仏教教育は遅れています。宗教省にも予算がなく、国際機関、外国政府、NGOなども含めてほとんど支援がない状態です。非常に重要な課題の一つです。



夢を支える奨学金の授与式

報告：吉田圭助（シーカー・アジア財団） 写真：瀬戸正夫

タイ **Thailand**

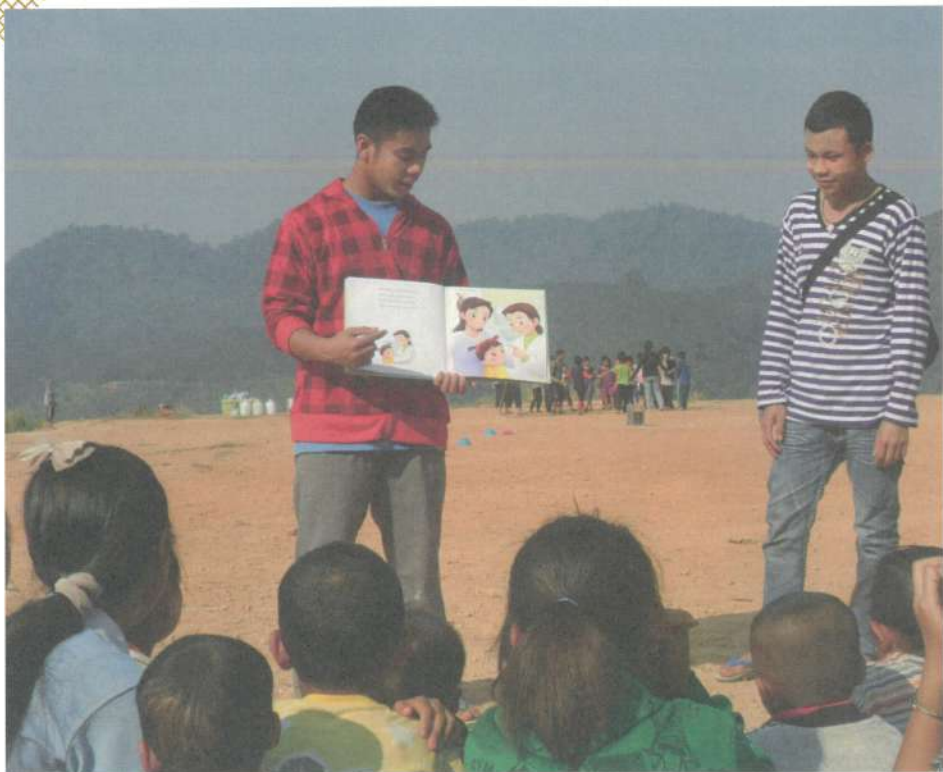
ラオスと国境を接するタイ北部パヤオ県に少数民族の学生たちが生活を営むシャンティ学生寮があります。5月24日、奨学金授与式が開催されました。当日は145人の奨学生が集まり、来賓から励ましの言葉や、生徒たちによる伝統舞踊が披露され、寮では賑やかな一日となりました。

シャンティ学生寮の寮生であるポーンペン・チームーさん（写真：高校2年生、アカ族）が、奨学生代表として御礼の言葉を述べました。ポーンペンさんは、昨年の事故で父を亡くし、母は足に大怪我を負いました。彼女には小さな弟がおり、母が一人で家族を養っています。

父の死について語る時、彼女の目からは涙が溢れ、会場は静まり返りました。「この奨学金は、私にとって大きな助けになっています。将来は学校の先生になり、私の村の同じような状況の子どもたちに勉強を教えたいです」と力強く話しました。

「アジア子ども奨学金」は困難な状況にある子どもたちの就学の機会につながっています。





図書館青年ボランティアの頼もしいリーダー

ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ **BRC** 報告：タナボーン・ジャラティウィブーン=エツ（BRC事業事務所）

標高1000mの山中にあるウンピラム難民キャンプ。ここの図書館青年ボランティア（TYV）のリーダー、ソーイエミンさん（写真左）は18歳。ミャンマー（ビルマ）に家族を残して、2006年に難民キャンプにやって来ました。

23人のTYVメンバーをまとめて、絵本の読み聞かせ活動や、学校や学生寮での人形劇公演活動に取り組んでいます。6月に研修を受けて、子どもたちへの読み聞かせにも自信ができました。

「僕も、毎日図書館で本を借りています。好きな本はやっぱり漫画かな。だって面白いでしょー」そう無邪気に話す笑顔はまだまだ高校生ですが、TYVの活動を始めるとその表情も一変。自信をもってチームを引っ張るリーダーの顔になります。

「本国にいたころは、図書館も見たことなかったし、子どもたちへの活動もなかった。この難民キャンプでは、子どもから大人まで図書館を利用できるし、僕らにとっても大切な場所なんだ。この図書館を支えていきたい」と、頼もしく語ってくれました。



少数民族の子どもたちの教育改善を目指して

報告：竹谷麻莉子（ラオス事務所）

ラオス Laos

SVAラオス事務所が学校建設を行っている、ルアンパバーン県ヴィエンカム郡。この郡の教育事務所所長を務めるのが、タラコーン・ポーラヴォンさん（写真）です。

「私はルアンパバーン県ルアンパバーン郡で生まれ育ちました。現在は妻と2人の子どもと、ヴィエンカム郡に住んでいます。小学生の頃から地理と歴史が好きで、高校教師として4年間、地理と歴史を教ええました。教師生活を通じて、若い世代に知識を伝えていくことの大切さを肌で感じてきました。特にヴィエンカム郡には少数民族の子どもたちが多く、彼らのラオス語の習得が重要な課題となっています。SVAと協力し、少数民族の子どもたちのためになる取り組みを行っていきたいと思います」

時間の許す限り小学校を訪問し現状把握に努めるなど、「行動第一」と「機会に恵まれない人々への支援」がモットーだというタラコーンさん。ヴィエンカム郡の教育改善について、ご自身の思いを力強く語ってくれました。



図書室を見守ってくれる集会室の管理人さん

岩手 **Japan**

報告：吉田晃子（陸前高田コミュニティ図書室）

岩手事務所の拠点の1つ陸前高田コミュニティ図書室は、モビリア仮設団地の北集会室の中にあります。「集会室に人がない」と住民が来づらくなってしまつと、自治会長が集会室の管理をモビリアに拠点をおくNPO「陸前たがだ八起プロジェクト」に依頼。6人が交代で、毎日午前9時から午後4時まで管理人として集会室に常駐しています。

管理人さん（写真）は集会室の掃除から始まり、その後は自分の時間を過ごしながらか、集会室の管理を行っています。図書室が休みの時は、利用者さんに「今日は図書室お休みですよ」と声をかけてくれます。

「図書室休みで、そのまま帰すのは、なんだかかわいそうでお茶一緒に飲んだのよ」と、図書スタッフの一員のように利用者さんに接していただいています。

朝の「今日もよろしくお願ひします」から帰りの「お疲れさまでした」まで、私たち図書スタッフも管理人さんを頼りにし、心強く感じながら日々の図書室開館も行っています。



図書館活動は子どもの学習達成度を改善するのか？

報告：三宅隆史（アフガニスタン事務所）

アフガニスタン **Afghanistan**

アフガニスタン事務所では、ナンガハル州で学校図書館事業をしている2校の小学生81人のパシュトゥン語（アフガニスタンの公用語）の進級（卒業）試験の点数とその子どもの図書室の利用頻度、図書貸出数のデータを2年分調べました。

図書館事業が始まる前と開始してから1年後の試験の点数を調べ、偏差値に転換しました。

このデータを分析した結果、子どもが週に1回図書室を多く利用すると、パシュトゥン語の偏差値が1点上がり、週に1冊多く図書借りると、パシュトゥン語の偏差値が1.3点あがるということが証明されました。一方、社会や理科、イスラム教などの他科目の達成度の改善にはつながっていないこともわかりました。

図書活動は、国語の学習達成度を改善することが明らかになりました。今後、教育省に図書活動をアフガニスタンの学校教育に取り入れることを働きかけていく際、今回の調査結果を活用していきたいと思えます。





来年の夏休みに帰ってきます

報告：白鳥孝太（気仙沼事務所）

気仙沼 Japan

7月に3カ月間のボランティアを終えた加藤匠かとうたくみさんに活動を振り返ってもらいました。

「気仙沼あそびーばー（写真）では、子どもは目を輝かせ、元気いっぱい遊んでいました。しかし、震災直後、暴言や暴力を振るう子どもが多かったとプレーリーダーから聞いて驚きました。子どもの心は深く傷ついたのに、それを吐き出す場が少なかつたのでしよう。ストレスや苦しみを外に出して心が楽になれたと思います」

当初はおとなしい印象の加藤さんでしたが、真剣に遊ぶことを通じて、子どもの胸の内を感じ取るまでに成長していたようです。それには子ども自身が木や竹、水、火を使い「やってみよう」と夢中になつてできるように、冒険遊び場に欠かせない存在の「プレーリーダー」から学んだことが多かったとのこと。

「私はここで、怪我をした時の対処、片づけ、人の心に寄り添い、接していくことの大切さを学びました。また気仙沼に帰ってこられるように受験勉強がんばります」。



一人でも多くの方に利用していただけるように

山元 Japan

報告：熊島好一（山元事務所）

「このエコクラフト、運転手さんが作ったの？」テーブルにあるミルクや砂糖を入れる手作り容器の出来栄に、お母さんたちが驚きの声をあげます。作ったのは、移動図書館車のドライバー、岩崎敏いわさきとしさん（写真）です。

「見よう見まねだったけど、凝っちゃって。図書館車で本を見て、勉強しているんだ」と笑顔で話す岩崎さんも被災者で、奥さんと二人、仮設団地で暮らしています。「あの時も、『津波だ！』と叫び声が聞こえて、近所のみんなで車で逃げて、なんとか助かった。2年前は本当に辛くて、誰にも会いたくなかった。集会所のお茶会を通して知り合いもでき、2年経って、ようやく笑えるようになりました」

今は通りかかる人を気づかう、岩崎さんの元気な声が響きます。

「図書館車に来てくれるのは、まだ元気な方。外に出てこない方もたくさんいる。隣同士、声をかけ合って出て来てほしい。移動図書館がそのきっかけになってくれたらいいね」。



敗 戦後の日本、町は廃墟と化し、人びとは食へるのが精一杯でした。しかし、言論統制から解放された社会で、3000社もの出版社がで、物資が乏しい中でも、多種多様な印刷物が出されました。それは、本を復活させることが命の復権に直結していると感じられていたからこそです。日本を文化国家にしたいという意気込みが出版関係者に満ち、そこから「本を読みましよう」という呼びかけにつながっています。「読書週間」はそのような時代に生まれました。

平和への願い、本のチカラ

「読書の力によって、平和な文化国家を作ろう」という「読書週間」の理念について、主催団体である公益社団法人 読書推進運動協議会（以下、読進協と記す）の会長である、小峰紀雄さんから、お話を伺いました。



小峰紀雄
公益社団法人読書推進運動協議会会長。子どもの読書推進会議代表。株式会社小峰書店代表取締役社長。
1938年宮城県生まれ。62年早稲田大学第一文学部卒業。71年株式会社小峰書店入社

読書週間の精神

——本日はお時間をいただき、ありがとうございます。まず、読書週間が立ち上がったときの経緯についてお聞かせください。終戦後2年しか経っていない時期に開催されていますね。戦後の貧困の中だったかと思いませんが。

現在の読進協が全国展開している春の「こどもの読書週間」、秋の「読書週間」は、関東大震災で大量の出版物が消失した翌年（大正13年）、日本図書館協会によって始められた「図書館週間」がルーツです。しかし、昭

和に入り自由に本が出せる状態ではなく、昭和14年の「一般週間運動廃止令」によって廃止に追い込まれてしまいました。その後、日本は第二次世界大戦を起して、他国を傷つけるだけではなく自国も大きな被害を受けるような状態になりました。

読書推進活動の原点は、戦争抜きでは語れないと思います。言論や出版、紙も統制されました。第二次世界大戦の悲惨な経験を通して、戦後の読書推進運動が作られていったと言えます。敗戦後の日本が平和憲法を選んだ

ということ、民主主義、国民主権という考え方を選んだんですね。

出版活動の活発化や読書意欲の高まりから、出版社・図書館・取次・書店・報道・文化関連各団体が読書週間実行委員会を結成し、「読書週間」が誕生しています。その動きは早く、第1回の案内が新聞に出たのは昭和21年でした。戦前の読書運動があったことも大きいでしょう。

「良書をつくって普及させる」のですね。

ことは、当時も今も変わらない読書週間の理念です。戦時中出版言論統制の中で殺された埋もれた本はたくさんありました。しょう。また、書きたくても書けなかった作家を発掘して新しい時代にふさわしい本を作ろうと、出版界は意欲的でした。良書とはなにか、みんな真剣に考えたと思います。良書が新しい国家を作るのですから。戦争はしない、命は大切にす

……そのことを出版物によって伝えようとしたのだと思います。復興の端緒にかかったばかりのころです。今とは言葉の重みが違いますよね。「平和」とは「和を大切にすること」。戦後68年を過ぎた現在、そのときに希望していた平和という言葉の意味が薄れて変容しているのではないかと危惧します。

——良書とはどう選ばれるものでしょう？

昭和33年に文部省（当時）が選定図書を選ぼうとしたとき、出版界が抵抗しました。「良い本は国が決めるものではない。良書というのは読者が決めるもの」という思いからです。「こういう本が生きたヒントになった」「元気が出た」……それぞれの人が固有の感性で本を選ぶという自律性、心の多様性が大切です。読進協も「これが良書

です」と勧めることはしません。「国が、良い本」と言い出したときには、なにかきな臭いことになる」、経験していますよね。

なにが良書かというのは、本に難しい。人の価値観は時代にあわせて動いていくものでもありません。だからこそ出版の自由を確保して、いろいろな本が読めるようにしておかなくては。本は生き物なんだと思います。

——SVAは読書によって生きる力を養い、多様な人びとが共存する平和な世界をめざしています。読書、本によって、達成される平和について詳しく伺いたいのです。

不安と混迷の時代にあつて、知を深め、心を豊かにする読書はますます必要になるでしょう。本は文化の種をまき、育てます。本によって「命の大切さ、平和の大切さ」といった生きる指

針を伝えていく。平和だから出版物が生まれるし、平和じゃない時代に、本が自由に読めなかつたということを日本人は身近に経験していたからこそ、その大切さは今でも生きているのではないのでしょうか。戦後に生まれた読書週間の精神というのはずっと生き続けていると感じます。

そこに多様な価値観、見方があることが大事です。良書とよべない本があつたとしても、そのことを包括したうえで、出版の自由があるということ。国家の立場から見ても「良くない」と思う本があつたとしても民主主義は出版の自由の上じゃないと成り立たないのではないのでしょうか。

——小峰会長が社長を務める小峰書店では児童書を出版されていますね。本にかける思いを

伺わせてください。

私自身の戦争経験があります。1938年生まれで、国民学校の最後の1年生でした。あのまま戦争が続いていたら出征していたのではないのでしょうか。それ以外の価値観がありませんでした。宮城県本吉町（当時）という自分の町から、石巻や仙台の町が空襲を受けて空を赤く照らすのが見えました。しょっちゅう艦砲射撃があつて、その音から身をひそめるのが、私の戦争でした。

父は広島で被ばくし、1954年、私が高校1年の時、亡くなりました。それからずっと「なぜ父は亡くなったのか」という理由を考え続けて、本として『ひろしまのピカ』という形になりました。そこまで、30年近くかかったわけですね。小峰書店では、1948年に



『赤い鳥 童話名作集』（全3巻）を発行しました。またまた紙などの物資が足りなくて、東京では印刷ができず、新潟まで夜行に乗って印刷したそうです。

『赤い鳥』は大正デモクラシーの時代の中で生まれました。優れた作家が子どものために書いた作品を掲載し、子どもの作文や詩、絵を載せて、子どもの表現・主体性を大切にしました。外国の作品の翻案もありました。「少国民」といわれた国家のいうとおりにすることが推奨された時代に、子どもの主体性を活

かそうとしていたのです。この『赤い鳥 童話名作集』が、小峰書店の出版の原点になりました。

——SVAは「絵本を届ける運動」「アジアの図書館サポート」「走れ東北！移動図書館プロジェクト」で、読進協から後援をいただいています。読進協から、当会の海外での読書推進活動はどう見えていますか？

私たちの活動にご提言もいただきましたらと思います。アジアでの活動が30年以上になるそうですね。私たち読進



『ひろしまのピカ』丸木俊 株式会社小峰書店・発行

1980年発行。「ピカは、ひとがおとさにやおちてこん」。日本で初めてM・L・バッチェルダ賞（アメリカ図書館協会）を受賞。14カ国語圏で翻訳され20カ国以上で読まれています。第3回絵本にっぽん大賞/よい絵本/第27回青少年読書感想文全国コンクール課題図書。2008年、SVA「絵本を届ける運動」によって、ミャンマー（ビルマ）難民キャンプの図書館へ送りました。

協も今までは活動を国内だけで展開していましたが、4月に公益社団法人へ移行し、定款も活動範囲を「国内外」と謳っています。公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）とのつながりも活かして、アジアでの読書の推進活動へ目を向けていくべきだと考えています。

読進協は出版社との関係がありますので、読書普及の推進をささえていくバックアップの役目を負うことができますから、アジアの本が無い環境で、識字

——本日は貴重なお話をありがとうございました。

（聞き手・広報課 清野陽子）

子どもたちを育む本のチカラ

近年まで内戦や戦闘があつたカンボジアやラオス、アフガニスタン。子どもたちに他者を思いやる力が養われる本、平和の大切さを考えさせてくれる本を届けたい。「知を深め、心を豊かにする」本のチカラをどう感じているのか、子どもと図書館員の声を聞きました。

「図書室には週3、4回は来ます」と元気よく答えるチャイナルちゃん。でも最近、つらいことがありました。1カ月前からお父さんがタイに出稼ぎに行つてしまつたのです。

「お母さんは一人で畑仕事をしています。朝早く家を出て、帰ってくるのは夕方。私は学校から帰つたら弟の面倒を見ているの」

チャイナルちゃんは学校の図書室に来ては、一生懸命絵本の物語を覚えていきます。お母さんがいなくて泣きじゃくる弟に

おはなしをしてあげていきます。楽しみなのはお父さんからたまにかかってくる電話。

「電話ごしに覚えたおはなしをしてあげるの。お父さんは嬉しそう」

国境の町にあるこの小学校は4割の父母がタイに出稼ぎにでています。バラバラになつてしまつた家族の心のきずなを「本」がつかないでいます。



本が見つけれない友だちに図書館を案内してあげる



タンマボンサー・ヴィエンナコーンくん

3年生・8歳

『バーバババのいえさがし』
作・絵 アネット・チソン/
イラスト ティラー

公共図書館が大好き。学校がお休みの時は、毎日来るよ。学校があると、きも、放課後になるとお父さんが図書館に連れて来てくれるんだ。だから、図書館にある好きな本の場所はほとんど覚えていよ。

一番好きな本は、「バーバババのいえさがし」。絵本のカラフルな色使いが好きだし、なかでも、家族みんなが助け合つて、自分たちの大好きな家を

建てている場面が一番好き。家族みんなの様子がとても楽しそうで、幸せそうに見えるから。絵本を読んでみて、みんなが助けあえば、なんでもできるし、いろいろなことがもつと楽しくなると思つた。

図書館でも、友だちが本を見つけれなくて、困っていると、いつしよに探して、「その本はここにがあるよ」って教えてあげるんだ。



お父さんに電話で覚えたおはなしをしてあげる

チューン・チャイナルちゃん
バンティミンチェイ州ボンロー小学校
5年生・12歳

カンボジア

『おおきなかぶ』を読んだ後かぶごっこをしているよ



シアン・ルティー先生
コンポントム州コーク・トローク小学校
図書館員・47歳

この小学校の敷地は内戦の時は病院だつたんだ。薬もそこらへんの木の根を混ぜたもの。注射だつて1本の針で100人は打つてたさ。針の先が丸くなつてくると砥石で磨いていたのを見たよ。だから子どもたちには同じ思いをさせたくないんだ。

子どもたちは絵本の中の登場人物からいろいろなことを学んでいるね。『おおきなかぶ』を読ん

だあと校庭で「かぶごっこ」をしているよ。みんな一つのことを成し遂げる話がいいね。

本は、この社会で何が善い行いで何が悪かを教えてくれる。絵本の中で、主人公が何かの問題を乗り越えるのを見て子どもたちは勇気や希望を持つ。そして本を飛び越え、行動を起こそうとしている。そんな本をたくさん図書室において、子どもたちの成長を一緒に支えたい。

「どうして人と動物たちが助けあうの?」と聞かれました



センインティラット・クーンゲンさん
ヴィエンチャン首都公共図書館
図書館員・30歳

図書館員になつて3年になります。子どもたちがどんどん、おはなしの世界に没頭していく姿が見られるので、読み聞かせをするのは楽しいですね。

読み聞かせをする時、子どもたちから質問が出る時もあります。ある時、「どうして人と動物たちが助け合うの?」って聞かれたんです。そんな時、私は、「けんかばかりでは、お互いに

傷つけあつてしまつて、傷つくことはとても痛くて、つらいことですよ。だから、みんなが仲良く助けあつて暮らしていくことが大事なの」と答えます。そんなやり取りをしています。本を読むことは楽しいだけでなく、子どもたちに大切なことを教えてくれると実感しています。

読書は、子どもたちの平和な未来に影響を与えるものだと信じています。



特別対談 ◆

活字を読むことは 自分が生きていくことにつながる

2012年秋から、SVAの図書活動を通じた東日本大震災被災地支援が宮城県亘理郡山元町と福島県南相馬市で始まりました。

資金援助とともに、定期的に社員やスタッフをボランティア派遣するブックオフコーポレーションの橋本真由美取締役相談役と、山元町内の徳本寺・徳泉寺住職であり、境内地を山元事務所に提供する早坂文明SVA常務理事との対談。移動図書館がつかなく縁です。(岩手・山元事務所長 古賀東彦)

それぞれの 3月11日

早坂 3・11によって、自分の中でいろいろなことが大きく変わったという方が大勢いると思います。

橋本 私は群馬県の渋川で講演中でした。その後、駅に向かったのですが、電車はもう動いておらず、電気も止まっていて。寒さの恐怖、そして真っ暗

な中で夜を迎えることになるのかという恐怖がありました。

早坂 あの日、山元町も昼間は晴れていたと思うのですが、夕方にかけて、雪がちらつくようになって寒かったです。

橋本 被災された方の体験を思うと恥ずかしいですが、ひとりきりでいた私は本当に心細くて、どこまで行けるかわからないけれど、タクシーを拾

つて、乗り継いで。家にとどり着いたのは夜中でした。

早坂 私はこの徳本寺のほかに、海岸近くにある徳泉寺の住職もしていて、そこで地震に遭いました。午後2時半くらいに檀家総会が終わって、檀家のみなさんは家に戻られ、私や役員は残って後片付けをしていたところに大きな揺れです。だれかが6mの津波がくると車のラジオで聞いたと言つて

(実際にその後山元町を襲った津波の高さは約15m)。それまでは松林や家に囲まれて意識しなかったけれど、徳泉寺が海から300m

くらいしか離れていないことに改めて気づいて。車で15分くらいの徳本寺に帰って来たのが3

時半。防災無線が常磐線の山下駅まで津波が来ているというのを聞いても、まだ津波に襲われるという実感はなかった。

橋本 タクシーで立ち寄ったコンビニは、店内の電気が消えていて、その間の中で人がうごめいている。異様な光景。

早坂 あの夜の寒々とした星明かりと月明かりは忘れられません。

橋本 電気がない闇夜ではそれが頼りでした。

早坂 次の日、あまりの被害の大きさを前に言葉を失いました。本当に身体が動かないほどの衝撃

でした。

普通のこと

普通でない日々

早坂 最初の3カ月くら

いは、避難所に行っても普通の挨拶さえできなかった。檀家さんが大勢いますし、お話しを聞いてさしあげなくてはいけないのだけれど。ご供養のこともある。普通のこと

が普通でなくなり、普通でないことが普通になった。毎日のようにお葬式があるなんて、普通ではない。

橋本 早坂さんの書かれた本で読みましたが、お子さんを津波で亡くされたご家族から、「4歳の子がひとりでお浄土に行けるのでしょうか」と尋ねられたと。私の孫も歳が近くて、読んでいて本当に辛かったです。

早坂 かける言葉もありませんでした。

お骨もあつて。亡くなった方も、残された方も辛かった。だらうなと。

早坂 あのところは毎日、遺体安置所や火葬場に行っていました。SVAが岩手県で移動図書館活動を始めるのと聞いたのはそのころで、これからはメ

ンタルな面の支援の出番。私にも被災地のブックオフでは商売どころじゃないと思っていました。

橋本 私も被災地の加盟店のオーナーさんから、お客さんが早くオープンしてくれと言っていると聞かされて、これはいつまでも悲しんでいられないと。命が大切なのはもちろんですが、命が助ければよかったです。ただ言っ

ていては済まない。

ていては済まない。

ていては済まない。

ていては済まない。

ていては済まない。

早坂 人間というのは大した生き物で、活字や音楽を身体に入れて生きていこうとする。それがないとだめになる。その意味で、SVAの移動図書館はいいなと。山元町での活動はブックオフさんの力添えがあつて、100倍の力を得たと思えます。

橋本 スリランカに図書館を建てることに役立てようという活動をしていたところに東日本大震災が起きました。海外も大変、大切だけれども東北だろと。約100社ある加盟店のオーナーさんにも賛同いただいて、SVAの活動をお手伝いすることになりました。

橋本 明るく話をされていても、お話を聞いているうちに壮絶な別れを体験されていると知らされたり。

早坂 そういう方たちは人に聞いてもらわないと整理できないんです。お葬儀の相談にいられた方と接しても大切なのはお話しをお聞きすること。どうして自分だけ生き残ってしまったのか、どうして家族は亡くなってしまったのか、そういう話を一所懸命される。知つ

心触れ合う 移動図書館

早坂 今回の震災は被害に遭われた方一人ひとりが本を一冊書けるくらい、すさまじい経験をしている。

橋本 顔を和尚さんに聞いてもらって安心するようですね。

橋本 昨年の秋に初めて移動図書館のお手伝いに来たときは、何と声をかければよいのか想像もつきませんでした。「大変ですね」だろうか「亡くされて悲しいでしょうね」だろうか、などと。今思えばなんて上から目線な考えだったろうと。それが仮設団地では、みなさん気さくに迎えてくださった。「銀杏が落ちてたでしよう。あれは売ると高いのよ」などと笑って教えてくれて、そのあとにボランティアでおじやました会社の別の者に、集めておいたきれいな銀杏を本当にあずけてくれた方もいらつしや

早坂 3・11前までどう生きてきたかが、3・11後につなががる。きちんと生きてきた人は、その後にも完全でないにしても、気持ちの立て直しができているように感じます。

橋本 それまでがないと、3・11後も自分が崩れてしまつてもいい。

早坂 厳しいかもしれないですが、できない理由を

る。お花の種をいただいで、それが咲くのを心待ちにしたり。これも立派な交流ですよ。

早坂 本の支援はいろいろあると思うけれど、人間に入つて、お茶を出したりお話し相手になつたりして触れ合うということとは珍しいと思います。

橋本 本のリクエストにお応えする仕組みがあるのもいいですね。「人が死なないミステリーを探して」なんてお願いが社内でも回つてきたこともありました。読みかけの本を津波で流されてしまった方にその本をお届けできて、大層喜ばれたところにも居合わせられました。

早坂 家を流されて、本当に茶碗一個まで流され

らしいことはないですね。

続けることの 大切さ

橋本 このような活動は、単発ではなく継続することが大切だと思つています。少なくとも3年は、ご支援を続けたい。その間に、ひとりでも多くの社員にボランティアを体験してもらいたい。私など、何度でも来たいくらい。

早坂 支援は一回で終わりはなく、足りないところははないか、想像力が必要ですね。

橋本 ボランティアにお邪魔した者が、早坂さんからお話を聞きしたり、お寺を見させてください。たりできれば、さらによい経験になると思います。

早坂 被災地が100%に戻るにはまだ何年もかかる。ひとりでも多くの人が継続して関わつてくれるとありがたいですね。

橋本 自分さえ生き残ればいいという考えでは企業は世間に認められない。寄付の額を自慢するのではなく、地道にこのよう

緒によくしていこうという考えがあつての行動をして、初めてブックオフという企業が世間に認められると思つています。

早坂 3・11前までどう生きてきたかが、3・11後につなががる。きちんと生きてきた人は、その後にも完全でないにしても、気持ちの立て直しができているように感じます。

橋本 それまでがないと、3・11後も自分が崩れてしまつてもいい。

早坂 厳しいかもしれないですが、できない理由を

震災のせいにしてはいけません。

橋本 自分のためでもありませんものね、生き方を見つめ直す。

早坂 確実なのはこれからのほうが長いということですよ。どこまでやったら完結できるのか、言えません。そのとき、本といるのはいつでもそばにあつて、読んで楽しみになつたり、心の支えになつたり。そのためにも移動図書館の活動が続けられるとよい。

橋本 移動図書館は本を

て、読みかけだった本、いつもそばに置いていた本も流された方が大勢います。オスマン・サンコンさんご自身か、出身のギニアの言葉だったかもしれませんが、ひとり一人の老人が死ぬのは、大きな図書館が焼けたのと同じ。なんだそうなんです。長年生きてきた人は図書館のようにたくさんものを持つていて、このふたつを同じに見るなら、本が流されてしまふ、自分の一部がもぎ取られたような大きな喪失感を抱いた人もいるはずですよ。移動図書館が訪れ、懐かしい本の手触りを感じることでできて、ここから自分も出発するのだと思つてもらえなう、こんなにう

持つて行くだけのようにして、それだけでない。

活字を読むことは自分が生きていく力を養うことにつながる。自分が元気な、目標をもって、生きていく。そのために、いまの時期はおにぎりではなく本が大切だと思つてます。移動図書館車が来るのを仮設団地のみなさんが待つていてくださる。寂しいときや辛いときには、本に癒されることもあります。参加させていだいて本当によかつたと思つています。



①②東日本大震災発災10日過ぎた山元町の様子(早坂文明撮影)③橋本真由美相談役もボランティア活動に参加④⑤ブックオフ社員ボランティアがスタッフと共に仮設住宅を回る



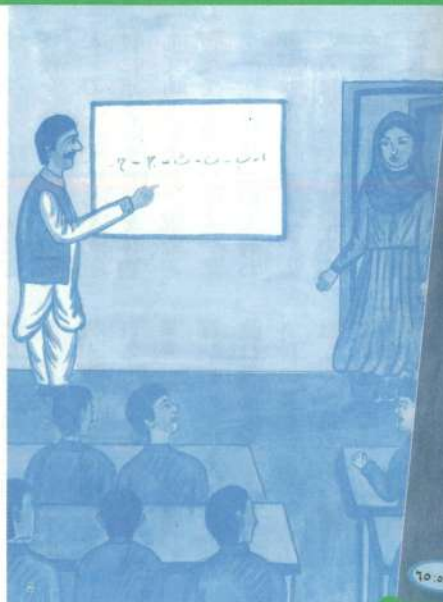
Blind Mother



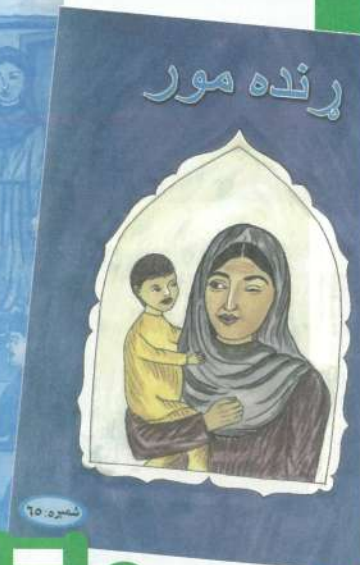
3
お母さんはみすぼらしいぼろぼろの服を着ていた。
「母さん、なんでこんなところまで来たんだ。出て行ってくれ」
「ほうや、あなたの結婚をお祝いするために来たのよ」
ぼくは怒っておみやげを放り出し、お母さんを家から追い出した。お母さんは泣きながら帰って行った。



4
数年後、ぼくは故郷に帰った。お母さんが亡くなったのだ。村の長老がお母さんから預かった包みを渡してくれた。そこにはお金と手紙が入っていた。
「わたしのかわいいほうやへ結婚おめでとう。
ひとつだけ伝えておきたいことがあります。私は生まれた時から目が見えなかつたわけではありません。あなたが子どもの時、屋根から落ちました。すんでのところまで私が抱きとめて大事には至りませんでした。
あなたは幼かったから、覚えていないでしょうね。私が片目になった理由を知っています。あなたがもう怒っていないことを祈ります。あなたと奥さんがずっと幸せでありますように」



7
ぼくのお母さんは、学校で小間使いとして働いていた。
「君のお母さんは片目が見えないんだね」
そう友だちに言われてから、ぼくは学校でお母さんを避けるようになった。それでも、お母さんはおいしいごはんや、すてきな服をいつも用意してくれた。



目の見えないお母さん

世界の絵本を読んでみよう④
創作絵本 アフガニスタン



2
学校を卒業したぼくは、高等教育を受けるために外国へ行った。その間、お母さんとは連絡を取ることはなかった。大きくなって、ぼくは外国で結婚した。報せを聞いたお母さんは、いままでもためたお金で、航空券とおみやげを買って、ぼくが住む町にやってきた。

シャンティな人たち

शांति



『演じてみよう つくってみよう 紙芝居』長野ヒデ子[編] 右手和子・やべみつりのり(石風社) 担当された「紙芝居であそんでみよう」の章では、ラオスとアフガニスタンで行ったワークショップの様子を紹介



『日本の神話シリーズ⑤小さな神さま』西野綾子[脚本] やべみつりのり[絵] (株式会社かみありづき) 出雲神話を子どもに伝える紙芝居シリーズ全6作。出雲大社にも奉納された

vol. 63 やべみつりのり

紙芝居・絵本作家



紙芝居・絵本作家として活躍する、やべみつりのりさん。ラオスやアフガニスタンに続き、今年1月には、カンボジア、ミャンマー(ビルマ)難民キャンプ事務所へ、スタッフや絵本出版関係者に向けた絵本出版の研修会に赴いていただきました。「良い絵本を作ることを追求し、温かく、時に厳しくスタッフを指導します。海外の絵本出版に期待されること、SVAへの提言をお伺いしました。」

SVAの応援団ですよ、ぼくは

1995年、SVAが団体紹介パンフレット表紙の原画を依頼してきたんだね。絵のテーマは「共生」、子どもたちが手を取り輪になっていく姿を描いた。初めてアジアへ行ったのもその年だった。それから毎年研修などでラオスへ通うようになり、NPO法人「ラオスの子ども」からラオスで絵本も出版している。

1995年は自分にとって転機になった。アジアへの旅を通して、前へとひたすら進む日本での自分の生活を見直すきっかけになった。

アジアの生活は、高度成長に入る前の日本を思わせ、そこでぼくは「子どものころの自分」の感性を思い出していた。日本が得たもの、失くしてしまった

もの、「本当の豊かさって何だろう」と考えるようになった。絵本にとって大切なこと、それは、詩人アーサー・ビナードが言っている。「文と絵は綱引き」だと。文に書いてあることは絵にしらない。絵に描けないことを文はおぎなう。そういう緊張感のある関係であり、その綱を渡るのが読者なんだ。「次をめぐりたくなる」わくわく感が命だね。

アジアの女性のたくましさやユーモラスに描いている。「わたしのなかの子ども」を読むと「子どもの自分」が彼女のの中に生き続けていることがわかる。こんなふうには、自分の中にあるものを発見していくことが大事なんだ。SVAの活動地の書き手作り手が、このように、その国独自の個性、自分ならではの表現を見つけられるようになってほしい。



タイとミャンマー(ビルマ)の国境にかかる橋

ていく姿勢を持っているのだから、期待している。「シャンティ」2012年秋号で難民キャンプ事業事務所のセイラーさんが書いていたエピソード、本棚の後ろに隠れて絵本を読んでいた子どもの話がいいね。その、子どもと絵本が一体になっているんだね。そういう現場の話をもっと読みたいなあ。(聞き手・広報課 清野陽子)



アジアの図書館サポーター

私の1冊

ASIAN LIBRARY SUPPORTER : MY RECOMMEND BOOK



学校図書館で仕事を始めた20代、この本に出会いました。教員の方が情熱を持って仕事をされる姿が、ぼうやのために自分の実や枝を与え続ける木に重なりました。

今は、ぼうやと木が仲良しだった場面が好きだけど、年をとって読んだら、年老いたぼうやが座るための切り株の姿がいいと感じるかもしれません。「いつになっても、何か他人のためにできることはある」と、気づかせてくれる本です。

母は「となりにも本のある暮らし」と、よく口にして、図書館に連れて行ってくれました。自分が働くようになってからは、その言葉を図書館の壁に貼って大切にしてみました。

両親が、愛情と本を惜しみなく与えてくれたように、私もちいさな木になりたいと思いました。そして今、心から「木は幸せ」と感じています。(吉田紀久恵さん)



おおきな木
シェル・シルヴァスタイン
[作・絵]
ほんだきんいちろう [訳]
篠崎書林



小学生の頃、山の中に家がありました。近くに図書館はなく、子どもだけで山を下りることはできなかつたので、近所に移動図書館が来たとき、とてもうれしかったことを覚えています。ひとりで行っても、必ず友達に会えました。移動図書館は、2週間に1度、学校の校庭に来てくれて、車体には、「11びきのねこ」が描かれていました。親しみやすい、ねこのイラストが、強く印象に残っています。

『ちいちゃんのはいしゃさん』は、小さい頃から家にあった絵本です。最後は虫歯になってしまってお話なのですが、ペロペロキャンディーやピーナッツ味や、次々に出てくる、あめちゃんがとにかくおいしそう大好きでした。(大江恵さん)



ちいちゃんのはいしゃさん
しみずみちを [作・絵]
はるぶ出版

日本 しゃんてい な旅



北海道札幌市

浄国寺



①三角山のふもとに位置する浄国寺本堂 ②開創70周年に再建された本堂にて高橋浄英住職 ③檀家さんと「絵本を届ける運動」にも取り組んでいただいている

◎曹洞宗浄国寺

札幌市西区山の手1条12丁目

◎周辺の見どころ

円山動物園
北海道神宮
宮の森ジャンプ競技場

◎アクセス

地下鉄東西線西28丁目駅でバスに乗り換え「宮の森4条10丁目」バス停下車。



地域で「三角山の禅寺」として親しまれる浄国寺。「人を救ってくれるのは仏様である」との思いから、本尊の弥勒菩薩を近く感じられるよう安置しました。背後には天女が舞い、向きあう人を温かく迎えてくださるようです。

「寺は地域に開かれたものでなくては」と、年間行事にあわせて講演会や映画の上映会を企画しており、世界に問いかける精神世界を描いた作品を選んでいます。講演者は住職自らが出演交渉にあたり、昨年は、龍村仁監督の「地球交響曲 第二番」

で紹介されていた「森のイスキア」主宰の佐藤初女さん呼びました。参加者と共ににおにぎりを作り、生きている姿勢がおにぎりを通して人につながっていくことを感じられたそう。

国際ボランティアの寺登録寺院として、2011年からは東日本復興支援活動にも寄付いただいています。

お参りの後に円山動物園で春に生まれた双子のホッキョクグマを見たり、札幌オリンピック会場だった宮の森ジャンプ競技場で深まる秋を感じるのも楽しみです。

SVAからのお知らせ

クラブ・エイド報告会

「タイ・ラオスの生産者を訪ねて」

日時:10月22日(火)18:30~20:00

会場:SVA東京事務所2階

利根川スタッフが8月に訪問した生産者の様子を報告します。14時よりクラブ・エイド製品を販売、掘り出し物セールもあります。

担当◎国内事業課 藤川和美・利根川佳子

スタッフ報告会

「すべての人に図書館を Library for All」

海外事務所ナショナルスタッフが来日する機会に、「本を読むこと」の価値について、一緒に考え、気づく機会にいたしたく、スタッフ報告会を開催します。

日時:10月23日(水)18:30~20:00

会場:ECOM駿河台

(東京都千代田区神田駿河台3-11-1)

報告者(予定):ヴィスナ(カンボジア事務所)、カムコン(ラオス事務所)、セイラー、トー(ミャンマー(ヒルマ)難民事業事務所)、シャザダ(アフガニスタン事務所)

第15回「図書館総合展」にブース出展

日時:10月29日(火)~31日(木)

会場:バンフィコ横浜(神奈川県横浜市・みなとみらい)図書館分野で日本最大のコンベンションです。

担当◎広報課 鎌倉幸子

人事のお知らせ

●入職

吉川剛……経理・総務課課長補佐スタッフ(7月16日付)

●退職

佐藤宣子……国内事業課「絵本を届ける運動」担当スタッフ(7月31日付)

●異動

秋原宏子……海外事業課アフガニスタン担当より、カンボジア事務所総務・国際担当へ(7月29日付)

加瀬貴……ラオス事務所副所長より、所長へ(8月3日付)

伊藤解子……ラオス事務所所長より、所長代行へ(8月3日付)

編集後記

小峰会長の「良書とはいえない本も包み込んでいくのが出版の自由」というお話に、「敵や反対者も含めて違いというものどう付きあうのか」(『泥の菩薩』336ページ)という問いかけが重なりました。「地球市民社会」という言葉に込められた厳しさについて、言及しているところ。民族、文化、言語、宗教などを超えて、自分と違う意見や価値観にも謙虚に耳を傾けられるかと問いかけています。多様性を認めることは、「違いから生ずる不快に耐え、面倒を引き受ける覚悟」(同上)が必要。自由について考えを深めた夏でした。

(清野陽子)

シャンティ 2013年秋 272号

2013年10月1日発行

発行人 若林恭英

発行所 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会
〒160-0015 東京都新宿区大塚町31 慈母会館2・3階
TEL 03-5360-1233 FAX 03-5360-1220
WEB: <http://www.sva.or.jp> E-Mail: info@sva.or.jp
郵便振替 00150-9-61724

編集人 関尚士

装丁・レイアウト 矢萩多聞

印刷 株式会社大川印刷

定価 550円

©2013. Shanti Volunteer Association. All Rights Reserved. Printed in Japan.

●当会へのご寄付は、所得税、住民税および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。

これがワタシの
チカラになる!



スタッフの昼ごはん

陸前高田コミュニティ図書館の職員さん、
今日のお昼はなんですか?



図書館活動
プログラム担当
吉田さん

スパゲティ
ナポリタン

図書館活動
アシスタント
津田さん

親子丼、三陸産
わかめたっぷりの
お味噌汁、キウイ

スタッフで育てた
ラディッシュ

オートミール、
パンバーク

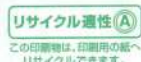
ラディッシュの
葉の漬け物



昼休みは1時間、みんなで昼食を持ち寄り、図書室内の丸テーブルで食べます。利用者さんと一緒に食べることも多いです。

今年、図書室ではアサガオ・きゅうりなどを植えて「緑のカーテン」を作りました。夏から秋は、野菜のおすそわけをいただいで、テーブルの上は賑やかになります。

月6日ほど移動図書館車で陸前高田、大船渡の仮設住宅を巡回。貸し出しや返却の対応、本の選定・購入などのほか、利用者さんと会話するのも大切な仕事です。図書室がみなさんの息抜きの場所になって嬉しです。(吉田晃子談)



「シャンティ」は、FSC®森林認証紙、ノンVOCインキ(石油系溶剤0%)など印刷資材と製造工程が環境に配慮されているグリーンプリンティング認定工場で製造されています。

saveMLAK等の支援で
建設された「どんぐり
アンみんなの図書室」
宮城県名取市



道

卷末言

私たちには
知る自由があり、
知る権利がある。

擁護されるべき 存在としての図書館

——アドボカシーの観点から

理事 岡本真
おかもと まこと

「アドボカシー」(Advocacy)と
いう言葉をご存知だろうか。

「弁護」「擁護」といった日本語訳があてられている言葉だ。東日本大震災に端を発する博物館・美術館 (Museum = M)、図書館 (Library = L)、文書館 (Archive = A)、公民館 (Kominakan = C) の支援活動であるsaveMLAKプロジェクトを発足させ、活動を展開して行く中で、私自身、強く意識するようになった言葉である。

この言葉は、日本社会に馴染みにくく、日本語としても定着しにくい。先に挙げた訳語も、しっくりこないだろう。ただし、用例に基づくと、多少わかりや

すくなる。たとえば、Child Advocate という表現があり、これは「子どもの権利擁護」と訳される。あるいは「人権擁護」という言葉の語感は、「アドボカシー」の意味を内包している。

「人権」や「権利」は、人が生まれながらにして持つものであり、奪われることがあってはならない。これらの言葉と一緒に使われることが多いと思うと、「アドボカシー」という言葉は、本来あってしかるべきものが、失われてしまっている状態を回復・改善しようというときに用いられるようだ。

冒頭で述べたように、私は被災地支援活動を行う中で、「アドボカシー」を考えるようになってきた。というのは、ここに図書館があるということは、「人権」そのものであり、万にもそれが無い状態は、改善されるべきこととして「擁護」され

なくてはいけないと気づいたからだ。

私たちには知る自由があり、知る権利がある。その自由と権利は基本的な人権の一つとして、常に叶えられているべきであり、もし、その権利が失われているのであれば、なんとしてでもその権利は「擁護」されなくてはいけない。それが図書館のアドボカシーなのだ。

そして、その権利を失うことがないよう、日頃からその絶対不可欠な重要性を訴え続けるべき対象が図書館なのである。

本会が活動の軸に据える「図書館」には、そのような意味があることを心に刻んで、新理事として歩んでいきたい。

アカデミック・リソース・ガイド株式会社
社代表取締役・プロデューサー / saveMLAK
プロジェクトリーダー